



最大6mの干満差

有明海は、佐賀・長崎・福岡・熊本
の4県に囲まれた内海である。平均水深20mほどの浅い海だが、干潮時と満潮時の水位差が最大、6mに達する日本一の干満差があり、沿岸部に日本最大の干潟が発達している。
約1万年前に氷期が終わわり、日本列島と中国大陸の間が海で隔たれて、有明海は約8000年前に誕生した。約6000年前の縄文海進の頃、有明海はいまよりも広がった。佐賀県にある縄文時代早期の東名遺跡や、弥生時代の吉野ヶ里遺跡は、吉野ヶ里丘陵の南端付近で海が進み、人々の生活を支えていたことを示している。



漁を終えて帰っていく漁船。干潟の産は有明海の鳥(佐賀県-福岡県沿岸)に行くにしたい大きくなる

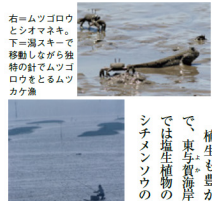
有明海の大々な干満差の理由は、独特の地形にある。内海の人口の幅が約4回と狭く、閉鎖的で細長い形をしているため、海水の干満潮汐

生息数が回復したムツゴロウ

有明海の豊かな自然の恵みも、人間も古来から享受してきた。佐賀県では有明海を「前海」、海産物を「前海も」と呼び、干潟を板で移動する「羽スキー」を用いるハゼ釣り漁やムツゴロウ漁、海苔の養殖を行い、海と共存してきた。しかし近年、深刻な環境変化が起きている。2000年頃に赤潮が発生し、養殖海苔が色落ちして漁獲が激減。有明海異変とと呼ばれて騒然となった。実はそれ以前から、ムツゴロウや二

の周期が長く、外海である東シナ海の潮汐周期の影響も受けて大きく共振するのだ。
有明海沿いの干潟は、干潮時で約

枚貝のタイラギ、アゲマキガイなどの海産物が減少していた。佐賀県が2005年3月に「有明海再生のための県民行動計画を策定する」と、環境問題への取り組みが本格化してから10年を経過したところだ。
NPO法人「有明海ふるりんネット」(佐賀市)は、有明海沿岸域に暮らす市民を、つとネットワークグループだ。有明海の魅力を発信して大切に開海を守るため、海産物のレシビア開発試食会、鹿島ガタリンピックなど地元祭りの参加や情報交換を続けている。市民をつなぐ金財団も活動を行っている。
「泥の海だからといって、海と触れあわずに一般市民が暮らすうちに、タイラギやアゲマキガイが激減して



植生も豊か
で、東与賀海岸では原生植物のシチメンソウの



海苔の養殖は有明海の主産産物の一つ。環境保全が生命線だ



特徴のアゲマキガイ。細長い形は形の中を移動するのに適している



上=カルガモとアオサギ。広大な干潟は水鳥の宝庫だ。左=秋に見頃となる東与賀海岸のシチメンソウ



上=浮島のように見えるカキ園。下=有明海ぐるりんネットによるカキ鑑賞学会



カタリンピックをはじめ干潟の広に親しむイベントも多い

しまいました。いまも刻々と変化している有明海。理解を深めて、人間と自然が海かに関わってきたふるさとに自信を持つてもらいたい。有明海の特徴のひとつで、ユニークな「原野」とも呼ぶのが、健康な有明海のみならず、前海のゆつたりとした光景と干潟の自然が、他県の人とも誇りにしながら、丸ごと次世代に引き継ぎたい」と、代表理事を務める荒牧軍治さんは話す。
一時期、絶滅の危機に瀕したムツゴロウは保護活動が実り、生息数が増えている。一方、タイラギは昨年冬まで4年連続休漁。自然の回復は容易ではない。さらに、海を取り戻した次世代に伝えるために、漁歌を伝えています。